

☆東宇治高校演劇部「ブンナよ、木からおりてこい」講評（第37回 Kyoto 演劇フェスティバル）

演劇部の皆さん、お疲れ様でした。とても楽しく、考えながら観させていただきました。

青年座の「ブンナよ、木からおりてこい」を観たのは今から35年以上前のことです。水上勉氏の人間を鋭く見つめた原作、それを深め、昇華させた小松幹生氏の脚本、斬新で軽快な篠崎光正氏の演出、そして俳優たちの熱のこもった演技、感動して息をのんだことを思い出します。「ブンナ…」はこれまでもたくさんの学校の演劇部で取り組まれてきました。それぞれの登場人物の行動が明確で「劇」というものの本質を学べる素晴らしい本だと思います。その「ブンナ…」を皆さんはどのように舞台に乗せるのか、期待を持って観劇しました。

皆さんがこの作品を愛し、精いっぱい演じておられることが舞台から伝わり力をいただきました。

皆さんの「ブンナ…」は、これまで各大会で好評を博してきたことと思います。今回も劇のテーマがしっかり客席に届きました。役者のそれぞれの人物へのアプローチもよかったですし、セリフも行動的で（少し滑舌の悪いところはありませんが）とてもいい作品に仕上がっています。それを踏まえた上で、ここでは高い評価を重ねて記すより、皆さんに考えていただくきっかけになれば（このキャストでの上演の機会はないかもしれませんが）と思い、感じたことを書かせていただきます。

幕が開くと舞台中央には四角い灰色の大きな台が置かれ、下手に灰色の幕が上から垂れています。このモノトーンの大道具がいろいろなものに見立てられていくのだらうと予想しました。大きな台がお寺の池の岩になったり椎の木のとっぺんになったりするのですが、木の上を連想させるには少し無理があると思いました。また椎の木を布で表現していましたが、この作品の椎の木の重要性を考えると「軽すぎる」思いました。木の布はなくてもよかったのではないのでしょうか。その方が木の巨大さを観客に伝えることが出来たのではないかと思います。舞台も台だけの方が象徴的になったと思います。

土ガエルの子どもの衣装は黒Tシャツに茶色のパンツ、ブンナだけがパーカーを着ている。衣装からブンナだけは特別という強いメッセージを感じましたが、あれでいいのでしょうか。確かにブンナは土ガエルとは違いますが選ばれた者と視覚的に見え過ぎないほうがいいのではないのでしょうか。土ガエルの子どもの中にもいろいろな個性があり、ブンナと対立する重要な役もあります。現状の衣装では個々の土ガエルの個性は埋もれてしまっていると感じます。ブンナと土ガエルはカエルとしては種類が違いますが同じ年代の少年たちなのです。衣装で、もう一つ違和感があったのはネズミです。ブレザー姿は他の登場人物と比べ硬い装いで、ある層の「男性」を象徴しているように見えます。「父」のイメージも垣間見えます。皆さんはネズミをどんな人物だと思っているのでしょうか。小松脚本ではドブネズミとして描かれていると思うのですが…。もしかしたら、上演時間制限のために脚本をカットしたことが影響しているのかもしれませんがね。どのような人物がブンナの命を守り地上に降りる力を与えたのか？これは大変大きなテーマです。潤色…たまきはる とありましたが、演劇部のみなさんは小松幹生さんの元の脚本を読了して潤色をされたのでしょうか。自分たちの力で上演脚本を練り上げていくことが、劇を創りあげる土台だと思います。

トンビは黒い大きな布で表現されていましたが、その巨大さや獐猛さをどうに見せるのか、課題が残ります。これも具体的に見せないで表現する方向もあると思いますが…。

ネズミから生まれ出る小さな虫たちをシャボン玉で表現するのは青年座と同じ手法でしたが、もっと圧倒的な量のシャボン玉が観たかったです（ストローを増やすとか）。それだけでこの作品の意味がしっかり見えてきます。大道具・衣装・舞台効果、すべてが劇の内容を表していることを忘れないでほしいと思います。

皆さんは素晴らしい作品を創り上げ、観客に人間について考えるきっかけを提示してくれました。大人になっても演劇を続けていかれることを心から願っています。

（ 講評者 大原 めい ）